

## まえがき

株式会社清光経済研究所では、2007年12月の創立以来、「柴田法則」の普及を図るため『柴田罫線鉤足法則書』や『天底と転換罫線型網羅大辞典』を販売して、柴田法則を一般投資家に広めてまいりました。その後も、鉤足法則や棒足法則の改訂版の出版、また、2006年10月には、従来の難解な法則書を現代風に改め1冊に凝縮した『柴田法則解説書』を発刊するなど、一般投資家が分かりやすく法則を理解していただくために努力をしてまいりました。

また、セミナーを東京、大阪などの主要都市で定期的で開催し、そのなかでも有料セミナーではありますが法則の勉強会を行い、また、セミナーに参加する機会のない方のために、通信講座も行ってまいりました。

ただ、従来弊社にて販売しておりました法則書類は、いずれも一般書籍と異なり、比較的高額だったため、一般投資家の方が気軽に購入して勉強するということまで至っておりませんでした。

そこで、弊社創立からちょうど10年がたったことも記念して、どなたにでも手にとりやすい版型と価格で「柴田法則」を気軽にどなたにも身につけていただけるような書籍を刊行する計画がなされ、本書の刊行となったわけです。

従来、清光経済研究所で発刊してまいりました「柴田法則書」は、柴田秋豊先生が考案された「棒足順張り48法則」「棒足逆張り48法示」「鉤足4法則」のパターンを解説し、それを読者に覚えていただくことを主眼としてまいりました。もちろん、数学の公式と同様にそのパターンを覚えることは大前提ですが、一部の研究熱心な方を除いては、法則書を購入されても最後まで読み通すことが難しく、なかなか身につかないまま中途半端に柴田法則を利用しているという状態だったようにも思えます。

そこで、本書では、なるべく株式売買の実践に役立つように、事例を豊富に取り入れ、また、投資家の投資スタンスの違い（たとえば中長期投資

を主体として投資を行う方、1週間程度での短期投資を行う方、その日の寄り付きで買って高いところで売るデイトレーダーの方など先考慮して、第5部に実践編を設けるなど、ただ単に法則を覚えるための書籍ではなく、日々の実践にも役立つように工夫を凝らしました。

本書では、目次をご覧くださいと分かるように、清光経済研究所の10年の歩みの中で、すべての法則・法示を参照する必要のないことから、まず、柴田法則中の重要な法則法示に絞り込んで、パターンごとにその成り立ちとともに解説しています。また、10年にわたるレポート等での銘柄紹介等の経験から、高確率で利益が取れる可能性が高い方法もいくつか研究してまいりましたので、あわせて紹介することによって、リスクの小さい株式投資に役立てていただけるよう工夫しています。

本書を隅々まで熟読していただき、有効な利用法を読者の方々が見つけ出していただければこれにまさる喜びはありません。

本書をぜひ最後までお読みいただき、ぜひ株式投資の世界で成果を上げていただくことを願っております。

2007年11月吉日

「第2部～第4部」法則解説部分より  
順張り法則部分

斜線を引いて売買を判断する法則は3パターン

前ページまでで、斜線の引き方はおおよそつかめたと思います。ここからは、棒足順張り法則の基本となる斜線を引いて売買時期を判断する法則について、そのパターンと定義を示しながら具体的に解説していきます。

通常、トレンドの変化を判断する場合には、下降トレンドから上昇トレンドへの変化と上昇トレンドから下降トレンドへの変化との2通りとなります。もちろん、トレンドの転換は、買いであれば少しでも安値で、逆に売りであれば少しでも高値で起こるにこしたことはありません。

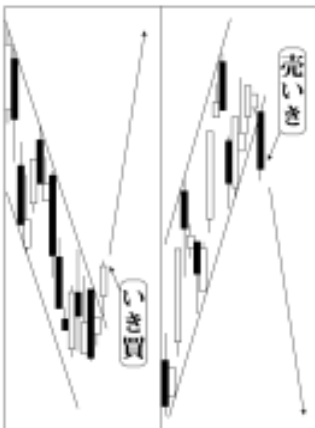
柴田法則では、トレンドの転換を次の3パターンに分類して法則としています。

- (1) 底値や天井での単純なトレンドの転換を判断するもの  
第一法則「いき」型
- (2) 二番底や二番天井でのトレンドの転換を判断するもの  
第二法則「いあ」型、第三法則「いん」型
- (3) 押し目や戻りでのトレンドの転換を判断するもの  
第六法則「いゆ」型

それぞれの法則はどのような状況あるいは相場のどの位置でトレンドが転換したのかだけの違いで、いずれも斜線を切ったか切らないかで判断していくものです。

それでは、それぞれを具体例を挙げながら解説していきましょう。

- (1) 第一法則「いき」型



【買い】

下げ基道や、押し目基道の上値斜線、  
その他下向きの上値斜線を  
陽線の終値で上に切れれば 買い

【売り】

上げ基道や、戻り基道の下値斜線、  
その他上向きの下値斜線を  
陰線の終値で下に切れれば 売り

法則の定義文を読むと、斜線を陽線あるいは陰線で切れば、どこでも売ったり買ったりできるイメージですが、先にも述べたようにこの「いき」型の場合は、買いであれば底値近くで、売りであれば天井近くでのトレンドの転換を判断するための法則だと考えてください。

実際の「いき」買い型の例を挙げておきましょう。

詳しい説明は必要ないと思いますが、下の大林組の週足で、下げ基道に引いた上値斜線Aを陽線の終値で上回ったところ( aの陽線の部分)が「いき」型買い法則の買い出動時期となります。

「いき」型買い法則の例

大林組 週足



## 「第2部～第4部」法則解説部分より 逆張り法示部分

### 3本のローソク足の組み合わせパターン

#### (1) 第五十一法示「よ」型



#### 【買い】

扇形の陰線か半値引けの陰線が、3のごとく一種類でも、4のごとく混じっても、この二種以外の陰線をはさみず、3本出現すれば買い。3のごとく陽線は何本はさんでも差し支えない。

#### 【売り】

扇形の陽線か半値引けの陽線が、1のごとく一種類でも、2のごとく混じっても、この二種以外の陽線をはさみず、3本出現すれば売り。2のごとく陰線は何本はさんでも差し支えない。

この法示は、81ページの表の扇形の陽陰線、半値引けの陽陰線の性質を組み合わせています。それぞれが天井や底を打ちやすい性質を持っていますので、それを3本組み合わせていることになります。

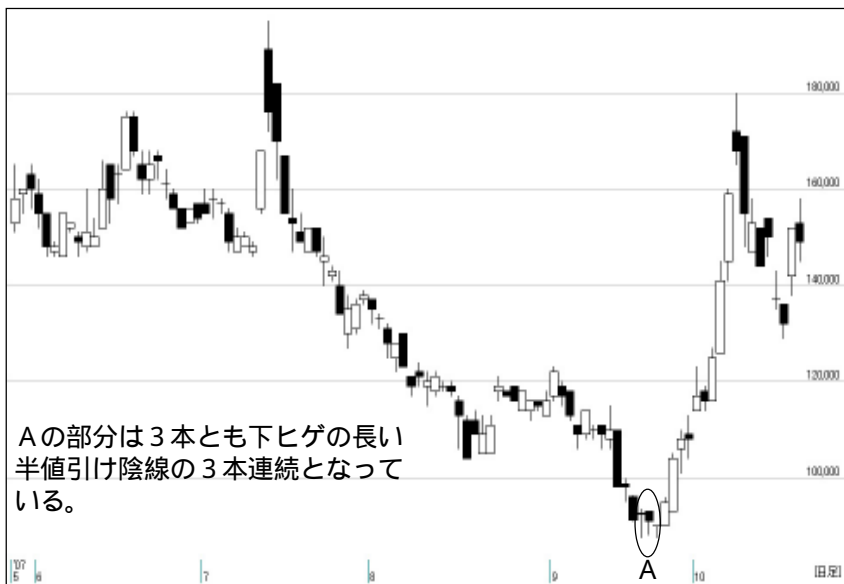
つまり、1本の線でも天井や底値になりやすいものを3本組み合わせて強化していると考えればよいでしょう。ちょうど、83ページの のパターンに当てはまるものです。

この法示は、常にある銘柄を追いかけている方には見つけやすい法示ですが、いきなり多くの銘柄からこの法示が出現している銘柄を探すのはけっこう大変です。そのような意味で、あまり使い勝手がよい法示とはいえないかもしれません。

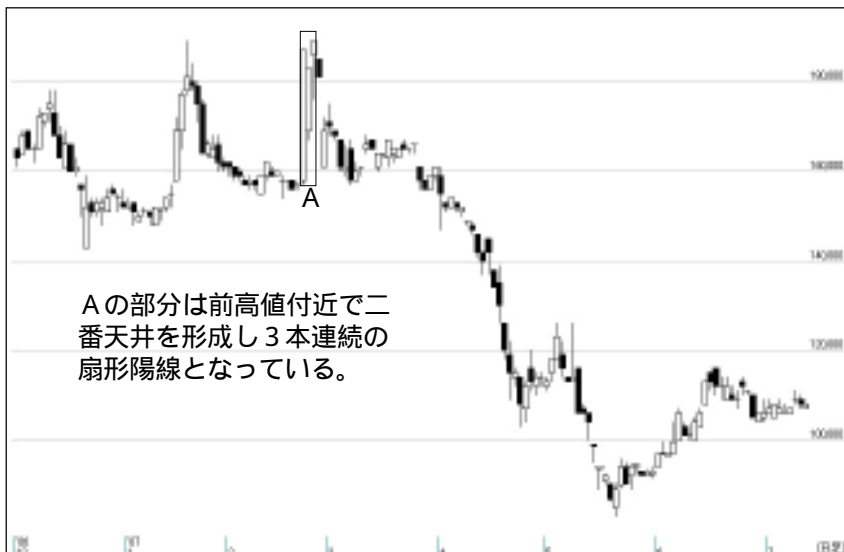
#### 《適用位置》

定義文が長いいため出現位置に触られていないが、奥義図でわかるように、買いパターンは下げの老境、売りパターンは上げの老境でしか使えません。

「よ」型買い法示の例  
サイバーステップ 日足



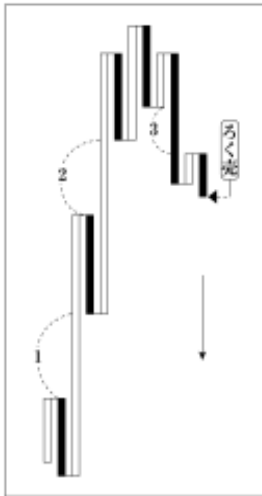
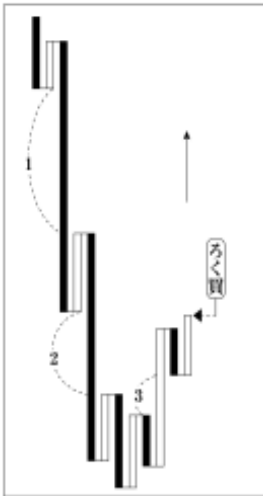
「よ」型売り法示の例  
インヴァスト証券 日足



# 「第2部～第4部」法則解説部分より 鉤足法則部分

## 鉤足「ろく」型 空間と行って来いをみるパターン

### (1)「ろく」型第一法則



#### 【買い】

3のような上げ空間をつけてから、前高値を2文上に切れば買い。

1や2は下げ空間なので買い法則ではみる必要がない。

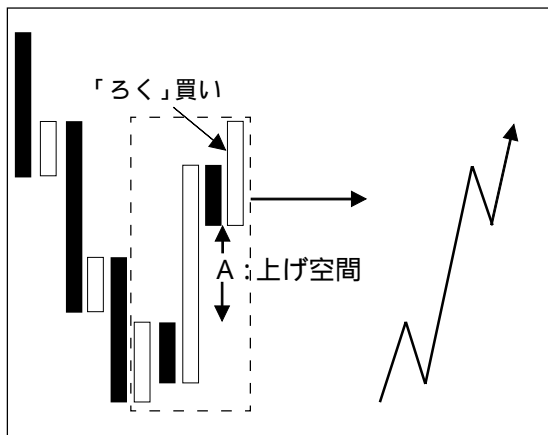
#### 【売り】

3のような下げ空間をつけてから、前安値を2文下に切れば売り。

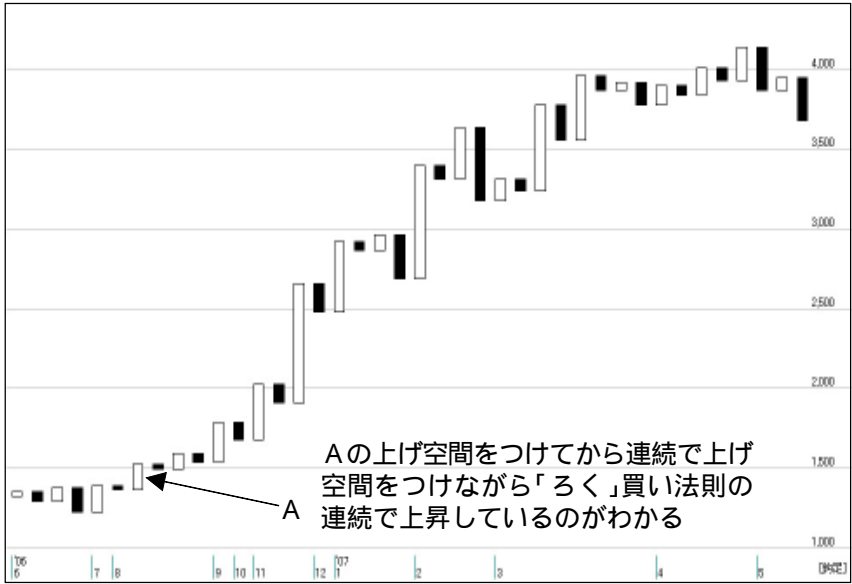
1や2は上げ空間なので売り法則ではみる必要がない。

これから解説する「ろく」法則は3パターンに分かれていて、それぞれが異なる考え方に基づいて作られています。

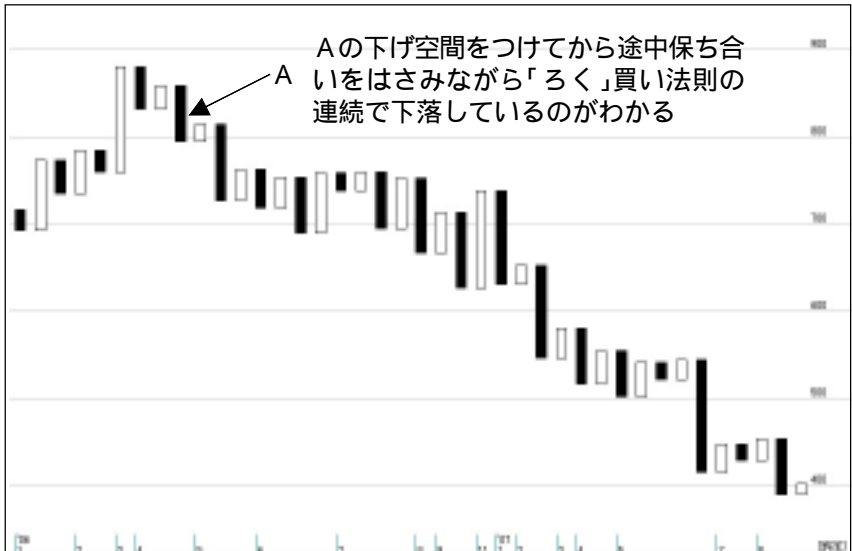
まず最初の「ろく」第一法則は「空間」に注目する法則です。この法則を右下の図で説明しましょう。鉤足で「ろく」買いと示された鉤足罫線の安値から法則出現までのローソク足の動きを略図として示しておきました。このように、上げ幅が大きく、それに対する押し目が小さい場合、上げる力が強いと判断されることがこの「ろく」買い法則が成り立つ根拠となっています。棒足法則では、順張りの「いゆ」法則(41ページ参照)のパターンを応用していません。



「ろく」型第一買い法則の例  
三菱電機 鉤足



「ろく」型第一売り法則の例  
新生銀行 鉤足





## 「第5部」実践編部分より 中長期投資向け部分

### 柴田法則を中長期投資に活用するためのポイント

前ページまでに述べてきた原則を大前提として、それ以外に実際に考えられるポイントを整理してみると、以下のようなポイントがあげられます。

- (1) 投資スタンスによって参照するチャートを変える
- (2) 相場状況によって法則、データを使い分ける

以下、順を追って実例をあげながら簡単に解説しておきましょう。

- (1) 投資スタンスによって参照するチャートを変える

現在、ご自宅にパソコンを持っていてインターネットを使いこなしている方であれば、手数料が安い、ネット証券に口座を開いている方が多いと思います。また、証券会社に口座を開いていなくても、インターネットは使えるという方もいらっしゃるでしょう。

そのような方であれば、ローソク足のチャートは日足、週足、月足の3種類のチャートを見ることが可能です(証券会社以外で無料でチャートの閲覧可能なサイトとしては「ケンミレニアム」が便利です。《<http://www.miller.co.jp/>》ここでは、チャート上にトレンドラインを引くことも可能です)。

残念ながら、柴田法則の鉤足罫線は、無料で閲覧できるサイトはありませんので、本書で解説した方法で手書きで罫線を引くか、清光経済研究所のプログラムあるいはネットメンバーサービスを利用いただければ、ローソク足と鉤足の併用で相場を観測することも可能です。

まずは、本書の第2部で解説した棒足順張り法則と第3部で解説した棒足逆張り法示を徹底的に身につけて、無料のチャートで相場の観測を行うことから始めるのがよいのではないかと思います。資金的に余裕のある方は、清光経済研究所のプログラムやネットメンバーサービスを利用いただければ、柴田法則の考え方に則った相場観測が可能になります。いずれにしても、本書の内容程度はまずきちんと頭に入れてから株式投資に臨まれることが大事です。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、前述したようにローソク足チャートには日足、週足、月足の3種類があります。これを、ご自分の投資スタンスに合わせて使いこなすことが大事なわけです。

いくつかのパターンに分けてみていきましょう。

## 「第5部」実践編部分より 短期投資向け部分

値上がり率ランキング、値下がり率ランキングを使う

毎日の場中や場が引けてから、市場ごとの値上がり率ランキング、値下がり率ランキングをチェックします。たとえば、買い銘柄を探す場合には、値下がり率上位銘柄に注目します。急落した銘柄の場合、翌日には反発する可能性も高く、そのような銘柄をいくつか選んでおき、指値で買いを入れておけばよいわけです。

仮に、続落した場合には、指値に届かず買えないわけですからそのときは、また同じように銘柄を探していきます。

逆に、超短期のカラ売りであれば値上がり率上位の銘柄、それも極端に上昇した銘柄などを狙うとよいと思います。

値下がり率ランキングに注目（ピクセラ 東 6731）



決算発表直前の銘柄に注目する

現在は、昔と異なり1年の内に4回の決算発表が行われています。特に、期末決算や中間決算では、そのときの相場状況によっては、決算発表が材料になって大きく株価が動く場合があります。

とくに、事前予想を越えての上方修正などがあった場合には株価が急上昇する場合があります。常にこのような銘柄を予測することは難しいのですが、いくつかあたりをつけておくだけでも大きな利益に結びつくこともあります。これは、短期売買に限らず、中長期投資でも言えることなのですが、特に材料難だったり、相場状況の悪いときの短期売買で有効です。